

安政の津波狂う下田港

安政東海地震

嘉永7（1854）年11月4日（11月27日『安政』と改元）午前8時すぎ、東海沖で大地震が起こった。『安政東海地震』といわれる巨大地震で、被害は関東から近畿に及んだ。理科年表には「居宅の潰・焼失は約3万軒、死者は2千～3千人と思われる」と記されている。

地震に伴って津波が発生し、房総から土佐までの沿岸を襲った。伊豆の下田では波高約5mの津波が数回にわたって襲い、全戸数856戸のうち全壊流失813戸、半壊25戸、死者は人別帳記載3,907人のうち85人、下男、下女、旅人、近郷の者を加えると500～600人という被害がでた。

ディアナ号の遭難

大津波が襲った時、下田港には、和親条約締結を求めてロシア軍艦ディアナ号が停泊していた。津波によって、約2,000トンの大艦が渦巻きの中に投げ込まれた杭のように回転したという。マストは折れ、舵と竜骨、船尾部が破損し、浸水も激しかった。

右の絵図はこの津波の模様を、ディアナ号乗組みの将校モジャイスキーが描いたもので絵の右端に見えるのがディアナ号である。

ロシア使節のプチャーチン提督は、早急に修理を行う必要性を訴え、修理地として伊豆西海岸の戸田港が選ばれた。

戸田港は十分な広さと深さを持ち、長く伸びた岬に守られて、冬の季節風の強いときでもほとんど風浪がない。破損したディアナ号はあまり遠くへ曳航することはできないなどが、修理地として戸田が選ばれた理由である。また、当時クリミア

戦争で交戦中のイギリス・フランスに、遭難を知られたくないロシアにとって、三方を山に囲まれた戸田港は秘密保持に格好の場所でもあった。

11月26日、ディアナ号は下田港を出航したが、西からの強い季節風に阻まれて戸田港へ入港することができず、富士の宮島沖まで流されてしまった。戸田をはじめ近隣の各港から200もの漁船が出て曳航しようと試みたが、激しい風雨に襲われて沈没してしまった。

ヘダ号の建造

代艦の建造が幕府に許可され、戸田港で建造されることになった。ロシア人と戸田の船大工が協力して建造に当たったが、何しろ未経験の洋式造船である上、言葉が通じないこと、メートル法と尺貫法の違いなど、困難が山積していた。加えて、戸田村でも津波で数十軒が倒壊、30人ほどの死者を出しており、そこへ500人ものロシア人を受け入れたのだから大変であった。

それでも、一刻も早く母国に帰りたいロシア人と、洋式の造船を学びたい日本人の思いが相俟って、100日余りという短期間で船は完成した。

安政2年3月10日進水式を迎えたスクーター船に、プチャーチンは感謝の意を込めて『ヘダ号』と命名し、こんな言葉を残してロシアに向けて出航した。

「吾が魂を永遠にこの地に留めおくべし」

幕末の大災害は、日本に新たな造船技術とかけがえのない友愛をもたらしたのである。

筒井久美子／戸田村立造船郷土資料博物館学芸員



「安政の津波狂う下田港」／戸田村立造船郷土資料博物館蔵

